目白大学　健康科学研究
第２号　2009年　65－72

複数の保健・福祉施設における老年看護学実習の学習効果

小林紀明　杉山洋介　黒臼恵子　堤千鶴子
（Noriaki KOBAYASHI　Yosuke SUGIYAMA　Keiko KUROUSU　Chizuko TSUTSUMI）

【要約】

３種類の保健・福祉施設実習〔介護老人保健施設・特別養護法人ホーム・老人福祉センター〕を取り入れた老年看護学実習において、実習目標の到達度を学生と教員の評価から比較し、更に実習終了後の課題レポートから学びの内容を抽出し分析した。その結果、学生・教員共に「高齢者を尊重する態度」が最も評価が高く、「社会資源の活用」が最も低い項目であった。教員と学生の自己評価の平均点に有意差はなかった。学びの内容は、「看護を捉える視点の深まり」「多様な高齢者施設の特徴」「『個』を捉える意識の広がり」「対象を理解する視点の広がり」「高齢者施設が果たす機能・役割」「ネガティブな感情」「社会資源の活用」「高齢化社会が抱える問題」「対象理解スキルに対する困難感」の９カテゴリに分類された。この結果から、教員と学生間の学習到達内容に関する認識の差がないことは明らかになったが、目標の「社会資源の活用」の到達度が低かった要因は、社会資源に関する「知識不足」と施設利用者との関わりだけに終始してしまう「視野や行動の狭さ」が影響していると考える。

キーワード：老年看護学実習、保健・福祉施設、学習効果、看護学生

１．はじめに

超高齢社会の到来を目前にしたわが国では、保健医療福祉の各分野において新しいシステムの構築が急速に進められている。看護の領域でも、高齢者看護に対する関心は高く、臨床の現場は勿論、地域社会に広く進出し、高齢者の健康問題に深く関わるようになってきている看護師の積極的な取り組みが期待されている。また、看護基礎教育を担う大学や専門学校などの教育機関でもこのような背景を踏まえ、社会のニーズに対応できる新しいカリキュラムの検討や現行の教育内容の見直しを行っている。しかし、最近の学生は、高齢者と一緒に暮らす生活経験や、日常の中で接触する体験が少ないため、どのように対応したらよいのか戸惑うことが多い。また、老化や活動性低下などのマイナスイメージに囚われがちとなり[1)]、高齢者だからこそ持ち合わせている力に視点が向かない、という現状がある。

本来、高齢者の看護とは、疾病や障害の修復に目標をおくのではなく、長い人生において、老いと共に疾病や障害を持ったとしても、できるだけその人らしい生活がおくれるようQOL（質の高い生活）の維持・向上に向け援助していくことを目指すものである。従って、ライフコースの最終段階に位置する人々の健康面のみならず、その人が歩んだ長い人生を常に視野に入れ、その人と共にいる家族を含めて援助する必要がある。また、高齢者＝虚弱者、というネガティブなイメージだけではなく、いきいきと生活している高齢者がとても多いことも事実である。このような高齢者と接して、ポジティブな老年観を持つことが老年看護を実践していく時に重要となる。

本学では、１年次秋期より「老年看護学概論」1単位30時間、２年次春期より「老年看護方法」1単位30時間の講義・演習を行っている。講義の中では、老年看護の対象を理解するために、身体面の変化だけでは

こばやしのりあき：看護学部看護学科
すぎやまようすけ：看護学部看護学科
くろうすけいこ：看護学部看護学科
つつみちづこ：看護学部看護学科

なく、精神・心理面や社会面の特徴を生活に結びつけながら解説しており、摂食・嚥下障害や排泄障害、脱水といった特徴的な症状とその看護や、日常生活における老年看護の視点などについて教授している。また、２年次春期終了後の９月に老年看護学の位置づけとしてコミュニティ実習（老年看護学Ⅰ）（以後コミュニティ実習とする）があり、コミュニティで生活するさまざまな健康レベルにある高齢者を理解するために、老人福祉センター（以後センターとする）・特別養護老人ホーム（以後特養とする）・介護老人保健施設（以後老健とする）において実習する。ここでは、生活（療養生活を含む）をサポートするシステム・社会資源についても学びが深まることを期待している。そして３年次は、通年で老年看護学Ⅱの専門看護技術実習が行われ、慢性・回復期にある退院の近い高齢者を受け持ち、老年看護の特徴について医療機関で実習する。ここでは、医療機関から在宅に移行する時期の専門職との協働についても学ぶ機会になる。つまり、３年次の老年看護専門領域の実習に於いて基礎となる、高齢者に対する全人的な理解や様々な健康レベルの把握が、２年次のコミュニティ実習を通して効果的に学習できているかを評価することが重要となる。先行研究では、同実習に近い形態で実施し、それを質的に研究している文献は幾つかあるが、センター・老健・特養の３種類を組合せている実習や、実習評価に視点をおいた量的研究と質的研究の両側面から研究している文献は見当たらなかった。

そこで本研究は、コミュニティ実習を実施している看護学科２年生を調査対象とし、“高齢者が生活するコミュニティの場を通して高齢者の特徴や健康のレベルにあった生活の多様性の理解”という実習目的において、どのような学習効果をもたらしたかを、教員評価と学生自己評価の比較、及び課題レポートの内容分析から明らかにすることで、今後の実習のあり方に対する示唆を得ることを目的として研究を行った。

２．研究方法

１）調査対象：コミュニティ実習を履修し、研究への参加を承諾した看護学科２年生87名と実習に関わった教員４名

２）調査期間：2007年９月10日～９月25日

３）調査方法：

①コミュニティ実習における教員評価と学生の自己評価との比較

②コミュニティ実習後の課題レポートの内容分析

４）実習形態

３種類の保健・福祉施設において１週間の実習を行う「コミュニティ実習」で掲げている実習目的・目標、方法・評価、分析方法について、以下に示す。

（１）　実習目的・目標

目的：

「コミュニティで生活する高齢者との関わりを通して、高齢者の加齢に伴う身体の変化やその生活の多様性および高齢者の生活をサポートする社会資源について学ぶ。」

目標：

①高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法を知る。

②高齢者が健康を維持するための方法について知る。

③高齢者の生きてきた時代を知り、その価値観や信念について理解する。

④高齢者の生活の場（療養の場を含む）について理解する。

⑤コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源について理解する。

⑥高齢者を尊重した態度で接することができる。

（２）　実習方法

①実習施設として、センター；３施設、特養；４施設、老健；３施設、合計10施設（３種類）がある。このうち、センター、特養、老健を各１施設ずつ＝計３施設での実習である。

②実習期間は１週間で、４日間の施設実習と１日の学内実習が含まれる。

③４―６人を１グループとし、全グループが原則としてセンターにおいて１日または２日間、特養において１日間、老健において１日または２日間実習する。

（３）　実習の自己評価および教員評価の方法

①学生の自己評価および教員評価項目は共に10項目で、共通の項目である。以下の表１に評価項目を示す。

②「学生の自己評価」基準

Ａ：できた
Ｂ：まあまあできた
Ｃ：あまりできなかった
※全項目に対して評価理由を具体的に記載する

③「教員評価」基準

できた＝10点
まあまあできた＝6点
あまりできなかった＝3点
※10項目で100点満点とし、60点以上で合格

表１　教員・学生自己評価項目

評　価　項　目	
1	高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法を知る
2	高齢者が健康を維持するための方法について知る
3	高齢者がどのような時代を生きそのことをどのように感じているかについて知る
4	高齢者の生活の場について知る
5	コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源について知る
6	高齢者を尊重した態度で接することができる
7	提出期限を守り提出できる
8	規定に沿って書かれている
9	テーマに沿って学習内容がまとめられる
10	今後の課題が明確に表現されている

５）分析方法

（１）　分析対象

表１の評価項目のうち、実習目標を示す６項目（以下簡略化した表現とする）〔１．老化に伴う身体変化、２．健康維持の方法、３．生きてきた時代や価値観、４．生活の場、５．社会資源、６．尊重する態度〕を分析の対象とした。

（２）「学生の自己評価」の得点化

「学生の自己評価」〔Ａ：できた、Ｂ：まあまあできた、Ｃ：あまりできなかった〕を教員評価と同じように〔Ａ：できた＝10点、Ｂ：まあまあできた＝６点、Ｃ：あまりできなかった＝３点〕として得点に換算し、単純集計した。

（３）　統計学的分析

「学生の自己評価」と「教員評価」の得点の平均値を比較（ｔ検定）し、実習目標の到達度を検討した。

（４）　内容分析

課題レポートの内容分析による学習内容のカテゴリ化によって、実習目標の達成度を検討した。

６）倫理的配慮

研究目的・内容・方法と参加撤回の自由、匿名性、成績評価とは無関係であることを文章と口頭で説明し、同意書の提出によって同意確認した。

７）用語の定義

コミュニティ実習：「コミュニティとは、居住地域を同じくし、生産・自治・風俗・習慣などで深い結びつきをもつ共同体＝地域社会を意味する。その中の一部である、老人福祉センターや特別養護老人ホーム、介護老人保健施設で生活する（療養生活を含む）さまざまな健康レベルにある高齢者の健康面、生活歴、その人と共に暮らす家族について理解し、更に生活をサポートするシステム・社会資源について学ぶ実習。」[2)]

３．結果

１）教員評価及び学生自己評価の得点

（１）　各評価項目の評価得点とその割合〔図１〕

項目１「高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法を知る」についての評価は、教員評価・自己評価ともに「よくできた（10点・Ａ）」が最も多くそれぞれ、54名（62％）・50名（58％）であった。次いで「まあまあできた（６点・Ｂ）」が多く、教員評価33名（38％）、自己評価36名（41％）であった。「あまりできなかった（３点・Ｃ）」と評価したものは自己評価で１名（１％）のみであった。

項目２「高齢者が健康を維持するための方法について知ることができる」は、項目１と同様に教員評価・自己評価ともに「よくできた（10点・Ａ）」が最も多くそれぞれ、50名（63％）・54名（62％）であった。次いで「まあまあできた（６点・Ｂ）」が多く、教員評価29名（36％）、自己評32名（37％）であった。「あまりできなかった（３点・Ｃ）」と評価したものは教員評価、自己評価ともに１名（１％）であった。

項目３「高齢者がどのような時代を生きそのことをどのように感じているかについて知る」は、教員評価・自己評価ともに「よくできた（10点・Ａ）」が最も多くそれぞれ、54名（62％）・50名（57％）」であり、「まあまあできた（6点・Ｂ）」が教員評価33名（38％）、自己評30名（35％）であった。「あまりできなかった（３点・Ｃ）」としたものは、教員評価では０名（０％）、自己評価では７名（８％）であった。

項目４「高齢者の生活の場について知る」の評価は、

教員評価・自己評価ともに「よくできた（10点・A）」が教員評価52名（60%）、自己評価46名（53%）で最も多く、「まあまあできた（６点・B）」が教員評価35名（40%）、自己評40名（46%）であった。「あまりできなかった（3点・C）」としたものは教員評価、自己評価ともに０名（０%）であった。また、評価を「BもしくはC」と評価したものが１名（１%）いた。

項目５「コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源について知る」の評価では、「よくできた（10点・A）」が他項目と比べ少なく、教員評価13名（15%）自己評価16名（18%）であった。一方で「まあまあできた（６点・B）」が教員評価で64名（74%）、自己評価で52名（60%）と最も多い結果となった。また、「あまりできなかった（３点・C）」としたものが教員評価10名（11%）、自己評価19名（22%）と他と比して多かった。

項目６「高齢者を尊重した態度で接することができる」は、「よくできた（10点・A）」が多数を占め教員評価77名（89%）、自己評価72名（83%）であり、その他はすべて「まあまあできた（６点・B）」と評価し「あまりできなかった（３点・C）」との評価はなかった。

（２）　評価項目１―６の平均点比較〔表２・３〕

各評価項目における平均点では、「６．高齢者を尊重した態度で接する」が、自己評価9.31点、教員評価

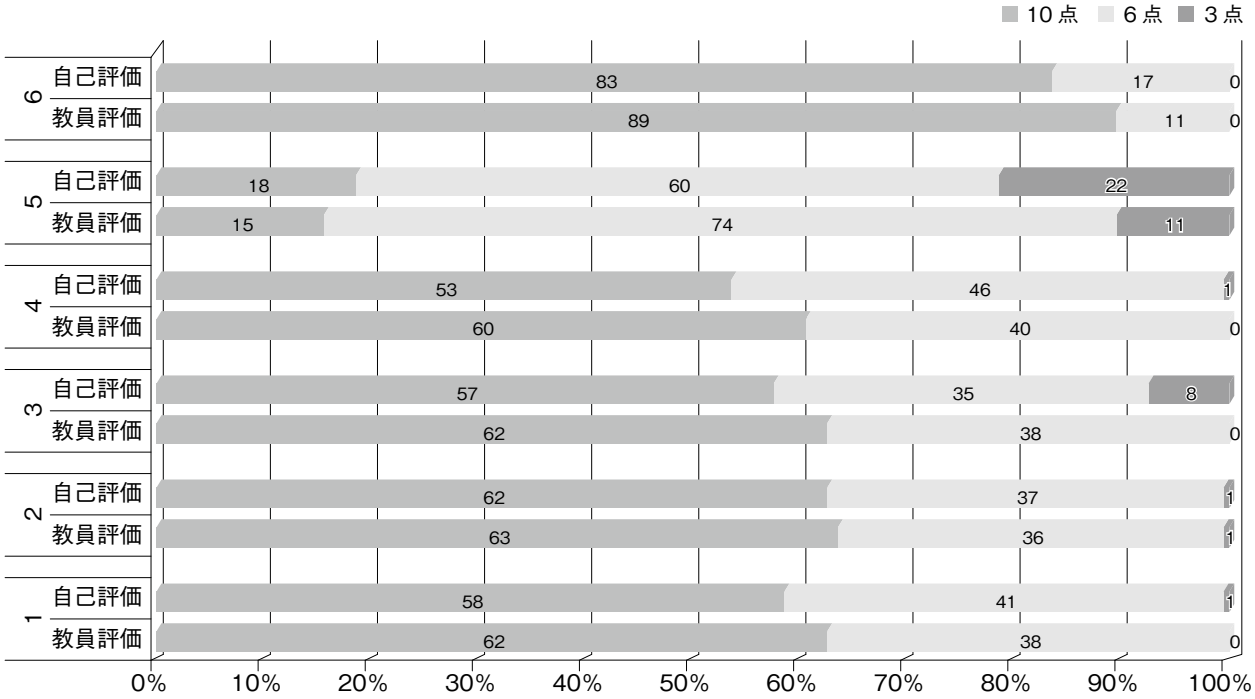

図１　教員評価と学生自己評価の得点割合

表２　評価項目１～６における自己評価と教員評価の「平均値」及び「標準偏差」

項　　目	自己評価と教員評価	N	平均値	標準偏差
１．高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法	自己評価	87	8.13	2.07
	教員評価	87	8.53	1.94
２．高齢者が健康を維持するための方法	自己評価	87	8.37	2.10
	教員評価	87	8.59	1.99
３．高齢者がどのような時代を生きそのことをどのように感じているのか	自己評価	87	8.06	2.40
	教員評価	87	8.39	1.97
４．高齢者の生活の場	自己評価	87	8.07	2.01
	教員評価	87	8.25	2.00
５．コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源	自己評価	87	6.08	2.23
	教員評価	87	6.38	1.89
６．高齢者を尊重した態度で接する	自己評価	87	9.31	1.52
	教員評価	87	9.41	1.51

表３　各評価項目における自己評価と教員評価の平均値の比較（ｔ検定）

評　価　項　目	等分散仮定	有意確率（両側）	平均値の差
１．高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法	する	0.187	−0.40
	しない	0.187	−0.40
２．高齢者が健康を維持するための方法	する	0.482	−0.22
	しない	0.482	−0.22
３．高齢者がどのような時代を生きそのことをどのように感じているのか	する	0.318	−0.33
	しない	0.318	−0.33
４．高齢者の生活の場	する	0.546	−0.18
	しない	0.546	−0.18
５．コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源	する	0.342	−0.30
	しない	0.342	−0.30
６．高齢者を尊重した態度で接する	する	0.653	−0.10
	しない	0.653	−0.10

9.41点で、ともに最も高く、「５．コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源」が最も低く、自己評価6.08点、教員評価6.38点となった。その他の１―４の項目ではすべて８点台の結果であった（表２）。

また、自己評価と教員評価での平均値の比較としてｔ検定を行った結果、有意差はなかった（表３）。

２）課題レポートの内容分析結果〔表４〕

課題レポートの記述内容から「実習での学びの内容」に関して1271コードを抽出し、その結果、51のサブカテゴリから最終的に９のカテゴリに分類された。カテゴリの分類は表４の通りである。

最多コード数のカテゴリは、「Ⅰ．看護を捉える視点の深まり」：380コード（29.9％）であった。続いて「Ⅱ．多様な高齢者施設の特徴」362コード（28.5％）、「Ⅲ．『個』を捉える意識の広がり」：174コード（13.7％）、「Ⅳ．対象を理解する視点の広がり」：168コード（13.2％）、「Ⅴ．高齢者施設が果たす機能・役割」：101コード（7.9％）、「Ⅵ．ネガティブな感情」：28コード（2.2％）、「Ⅶ．社会資源の活用」：23コード（1.8％）、「Ⅷ．高齢化社会が抱える問題」：18コード（1.4％）、「Ⅸ．対象理解スキルに対する困難感」：17コード（1.3％）であった。

カテゴリ別では、「Ⅰ．看護を捉える視点の深まり」は14のサブカテゴリから構成されていた。その中で、最多コード数は、〈コミュニケーションの重要性〉であり、センター・特養・老健の各施設における利用者との関わりの中で、コミュニケーションが最も重要であることを、学生の多くは実習を通し学ぶことができていた。次の〈学習課題の明確化〉では、高齢者の身体的変化や認知症、幅広い教養などを学習する必要性と今後の実習への継続性を明確にしていた。

「Ⅱ．多様な高齢者施設の特徴」は、７つのサブカテゴリから構成されていた。最多コード数は〈老人福祉センターの特徴〉で、次に〈個別性を踏まえた援助の方法〉であり、各高齢者施設の特徴を学ぶことができていた。

「Ⅲ．『個』を捉える意識の広がり」は、〈生きてきた時代や価値観の理解〉のサブカテゴリが最も多かった。高齢者の多くが戦争を体験してきており、過去の体験が価値観に影響していると考えられること、その価値観を理解し関わることが大切なことを学んでいた。

「Ⅳ．対象を理解する視点の広がり」は、高齢者の身体面、心理面、社会面のサブカテゴリがあがり、高齢者理解への深まりがみられた。

「Ⅴ．高齢者施設が果たす機能・役割」は、〈健康維持としての役割〉と〈リスクマネジメント〉のサブカテゴリが上位であり、老人福祉センターが高齢者の生きがいや友達づくりなどの役割を果たしていることや各施設において利用者の安全を確保していることが理解されていた。

コード数が少ないカテゴリとして「Ⅵ．ネガティブな感情」のサブカテゴリでは、〈施設に対するマイナスのイメージ〉や〈理想と現実のギャップ〉などがあがった。特養や老健の施設利用者が、家族の受け入れなどから家に帰ることができない現実や食事場面で利用者の人格を尊重しえない援助に対する驚きや戸惑い、特養や老健施設の暗いイメージなど特別養護老人ホーム

や介護老人保健施設へのネガティブな感情がみられた。

「Ⅶ. 社会資源の活用」のサブカテゴリは〈社会資源の活用〉の１つのみであり、学びが少ない傾向にあった。

「Ⅷ. 高齢化社会が抱える問題」のサブカテゴリでは、〈家族が抱える問題〉〈高齢者に対する社会的課題の認識〉〈在宅で生活する意義〉の３つがあがった。特に、家族が抱える問題としては、特養や老健の入居者

表４　課題レポートの内容分析結果

	サブカテゴリ（コード数）	カテゴリ（サブカテゴリ数）	コード数合計（%）		サブカテゴリ（コード数）	カテゴリ（サブカテゴリ数）	コード数合計（%）
1	コミュニケーションの重要性（136）	Ⅰ看護を捉える視点の深まり（14）	380（29.9%）	27	高齢者の身体面における対象理解（77）	Ⅳ対象を理解する視点の広がり（5）	168（13.2%）
2	看護につながる学習課題の明確化（60）			28	高齢者の心理面における対象理解（49）		
3	認知症の方との関わりから得た学び（44）			29	高齢者に対するイメージの変化（25）		
4	生活の場という観点（39）			30	高齢者の社会面における対象理解（14）		
5	高齢者を理解しようとする姿勢の大切さ（30）			31	健康意識の高さ（3）		
6	自立支援の必要性（20）			32	健康維持としての役割（16）	Ⅴ高齢者施設が果たす機能・役割（10）	101（7.9%）
7	看護師の役割（18）			33	リスクマネジメント（16）		
8	机上とは異なる看護実践の学びの深さ（12）			34	他職種との連携・協同（15）		
9	スタッフの前向きな姿勢（5）			35	施設が担う役割（12）		
10	援助者としての意識（4）			36	リハビリテーションの重要性（11）		
11	全人的な看護の視点（看護観）（4）			37	QOL向上に於いて施設が果たす役割（10）		
12	意図的なかかわり方（3）			38	ADLの向上において施設が果たす役割（7）		
13	広い視点からのアプローチ（3）			39	交流の場として施設が果たす役割（7）		
14	利用者との信頼関係（2）			40	施設の方針･考え方（4）		
15	老人福祉センターの特徴（89）	Ⅱ多様な高齢者施設の特徴（7）	362（28.5%）	41	他職種の役割（3）		
16	個別性を踏まえた援助の方法（67）			42	施設に対するマイナスのイメージ（12）	Ⅵネガティブな感情（4）	28（2.2%）
17	高齢者が利用する施設の特徴と比較（57）			43	施設における理想と現実のギャップ（11）		
18	特別養護老人施設の特徴（55）			44	リアリティショック（3）		
19	介護老人保健施設の特徴（48）			45	高齢者への関わり方に対する矛盾（2）		
20	利用者に合わせた配慮と工夫（33）			46	社会資源の活用（23）	Ⅶ社会資源の活用（1）	23（1.8%）
21	施設内生活の特徴（13）			47	家族が抱える問題（9）	Ⅷ高齢化社会が抱える問題（3）	18（1.4%）
22	生きてきた時代や価値観の理解（72）	Ⅲ「個」を捉える意識の広がり（5）	174（13.7%）	48	高齢者に対する社会的課題の認識（7）		
23	高齢者の個別性（36）			49	在宅で生活する意義（2）		
24	高齢者の尊重（31）			50	コミュニケーションの困難さ（15）	Ⅸ対象理解スキルに対する困難感（2）	17（1.3%）
25	生きがいを持つ意義（30）			51	対象理解の困難さ（2）		
26	自己決定の重要性（5）				合　計		1271

家族の介護負担があること、家族の面会者が少ないことなど、少数ではあるが理解していた。

「Ⅸ. 対象理解スキルに対する困難感」のサブカテゴリは、〈コミュニケーションの困難さ〉と〈対象理解の困難さ〉の２つであり、特に認知症のある利用者との関わりや対象理解の困難さが見られた。

４．考察

１）各評価項目における教員評価及び学生自己評価得点について〔図１・表２・表３〕

図１単純集計結果や、表２の得点平均値の比較、表３のｔ検定結果からも分かるように、教員評価と学生自己評価の得点差はなく、両者間に有意な差は認められなかった。特に、項目１―４はＡ評価（できた）の割合が６割前後で、項目６においては８割以上であった。逆に、項目５のＡ評価（できた）の割合は２割に満たなかった。

そこで、各評価項目（１―６）の得点に換算した結果に着目し、各項目の得点が意味するものについて、課題レポートや自己評価表の記載内容を基に考察した。

○評価項目１：「高齢者の老化に伴う身体の変化に応じた生活の方法を知る」

身体機能の低下がその人の生活にどのような影響を及ぼしているかについては、高齢者とのコミュニケーションや援助体験から深く理解していた。例えば、皮膚の状態、聴力の程度、関節の可動域などについて、実際の高齢者の行動レベルを観察・判断していることが自己評価表やレポートの内容から読み取ることができる。従って、授業を通して得た知識を実習の場で確認・統合できていると考える。

○評価項目２：「高齢者が健康を維持するための方法について知る」

高齢者の健康維持の方法における理解は、項目６に次いで２番目に高い得点であった。これは、会話によるコミュニケーションが成立しやすいセンターでの実習が影響していると考えられる。また、特養や老健でも、職員の積極的な関わりによって高齢者が趣味や生きがいを持ち、精神的な健康の維持につながっている現状[3]を知ることができたのも誘因の一つと考える。

○評価項目３：「高齢者がどのような時代を生きそのことをどのように感じているかについて知る」

学生の記録内容を見ると、戦争の体験談や自分の意志で自由に決められない時代だったことやそのことに対する「辛さ」「悲しみ」あるいは「喜び」などの思いについての記述が多かった。学生は意識的に会話を持つことによって、高齢者の生きてきた時代背景を知ることができたと推測される。つまり、高齢者の「生きてきた時代」「価値観」「信念」を実習目標として設定することによって、主体的な学習の動機付けになったと考える。

○評価項目４：「高齢者の生活の場について知る」

老人福祉施設では「年金生活者が多い」「リハビリなどで定期的に通院している」「余暇活動を通した仲間作り」など、経済状況や社会との繋がりについて理解を深めていた。特養では生涯を施設で過ごす人もいること、老健ではリハビリを中心に生活のリズムが組み立てられながら在宅へ移行するための様々な取り組みが行われていることを知った。どちらも施設がその人の生活の場であること[4]を実感していた。３種類の異なる施設での体験を通して、高齢者の生活の場に対する視野を広げられたことが高い評価に繋がったのではないかと考える。

○評価項目５：「コミュニティで生活する高齢者をサポートする社会資源について知る」

評価点が低い理由として考えられることは、「社会資源に関する知識不足」と「視野の狭さ」である。センターの施設内には、様々な情報が掲示されており、施設職員に積極的な働かけができれば得る情報も沢山ある実習環境だった。しかし、学生にとっては施設利用者と関わることが優先され、周囲の情報にまで視点を向けられなかったのではないだろうか。また、社会資源と呼べるものに関する認識が薄いので、高齢者に対してどのように活用しているかを聞き出す手だてを見出せなかったのではないかと考える。今後は、授業の中での意識付けや、実習施設での関わり方などについて検討する必要がある。

○評価項目６：「高齢者を尊重した態度で接することができる」

１年次からの実習・演習を通して培った学習者とし

て姿勢や、授業の中で高齢者を尊重する姿勢の重要性を教育してきたこと、また、実習の場面で、教員や指導者がモデル行動として見本となる関わりを示したことが反映された結果だと考える。

２）各評価項目における教員評価と学生自己評価の平均値の比較について〔表２・３〕

教員と学生の評価得点平均の比較において有意差を認められなかった。これは、教員と学生共に目標到達度の評価において双方の認識が一致していたことを示している。松本ら[5]が述べているように、実習指導において目標を達成するためには、実習施設にある教材を使った教員の意図的な関わりが重要となり、それが、学生の実習に対する充実感、あるいは不全感として学習者の自己評価に影響すると考えられている。従って、６項目の中で、平均点が８点以上の項目〔１，２，３，４，６〕は、学生が実習に対して充実感を持つことで目標達成に繋がり、教員も学生に対して意図的な指導ができた結果として、学生と同じ高い水準の評価になったのではないかと考える。また、唯一平均点が６点台の項目〔５〕も、学生の実習に対する不全感の表れとして、教員の意図的なかかわりが不足していた結果として、学生と同じ低い水準の評価になったのではないかと考える。

３）課題レポートの内容分析結果について〔表４〕

コード数で上位を占めるカテゴリは、実習で掲げている目標をほぼ網羅した結果であった。しかし、カテゴリ「Ⅶ　社会資源の活用」や「Ⅷ　高齢化社会が抱える問題」に関する学びが少ない現状は、知識不足と施設利用者との関わりだけに終始してしまう、視野や行動の狭さが影響していると考えられる。更に、介護職や市の職員など看護師以外の職種と関わる機会が多い中で、カテゴリ「Ⅰ　看護を捉える視点の深まり」が最も多いという結果は、予測を超えた学習者の看護に関わる姿勢の向上を反映していると考える。

また、カテゴリの中には効果的な学習の深まりだけではなく、「Ⅵ　ネガティブな感情」や「Ⅸ　対象理解スキルに対する困難感」といった、マイナス要因の存在も明らかとなり、実習に対する不全感へと繋がらないフォローアップの必要性が示唆された。これらのことから、講義内容・方法及び、看護をより意識づけるための実習目標の再検討が必要であると考える。

５．結論

１）教員評価と学生自己評価の得点差はなく、両者間に有意な差は認められなかった。

２）評価項目：「老化に伴う身体変化」「健康維持の方法」「生きてきた時代や価値観」「生活の場」「尊重する態度」の５項目は、教員・学生共に評価が高く、「社会資源」だけが共に低い評価だった。

３）評価が高かった項目の分析から以下の点について示唆を得た。

・授業を通して得た知識を実習の場で確認・統合できれば学習効果が高まる。

・実習目標に適した実習施設の選択と実習施設職員の積極的な関わりが目標の到達度を高めた。

・３種類の異なる施設での体験は、高齢者の生活の場に対する視野を広げる要因となった。

・教員や指導者がモデル行動として見本となる関わりが学習者の行動に影響する。

４）社会資源・社会問題に関する学びが少ない現状は、知識不足と施設利用者との関わりだけに終始してしまう、視野や行動の狭さが影響していると考えられた。

引用文献

１）大石和子，蒔田寛子：高齢者のプラスイメージを形成する老年看護学実習の検討．日本看護学会論文集　看護教育　35，94-96（2005）

２）山縣文治ほか：社会福祉用語辞典．第４版，pp104，ミネルヴァ書房（2004）

３）古村美津代，中島洋子：健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び　―実習記録の分析から―．老年看護学　8（1），78-85（2003）

４）大谷愛子，中田芳子，清水奈緒美：老年看護学実習に「老人保健施設」の実習を取り入れて　高齢者の生活に基盤をおいたケアの大切さ．神奈川県立病院付属看護専門学校紀要　4，19-23（1999）

５）松本賢哉，下里誠二，森千鶴：精神看護学実習に対する充実感と学生による指導者評価との関連．日本看護学教育学会学術集会講演集，17，227（2007）